

みんなで創る温かい高齢化社会

岐阜県各務原市立稲羽中学校三年

横山 礼奈

みなさんは、人生100年時代という言葉聞いたことはありますか。

私のひいおばあちゃんは98歳で亡くなりました。ひいおばあちゃんは、半年前から老人ホームに入り、亡くなる直前まで、施設のおじいちゃんおばあちゃんとレクレーションに参加したり、施設の方と楽しくお話したり、楽しく元気にしていたことを誇りに思います。今、人生100年時代といいますが、100歳まで元気に楽しく生きることが大変で、むずかしいことだと思います。生前、ひいおばあちゃんは、「早く天国に行きてえ。」

ということがありました。

「なんで？」

と私がひいおばあちゃんにきいたら、

「施設に行くとお金がかかるし、みんなに迷惑がかかるから。」

と答えました。その時のひいおばあちゃんの悲しそうな寂しそうな顔を見て、私もなんだか悲しい気持ちになると同時に、私はひいおばあちゃんに長生きしてほしいと思っているのに、ひいおばあちゃんは全く正反対なことをいつていることにおかしいと思いました。

今、日本では少子高齢化が問題になっていると聞きます。高齢化が進むと、医療費、介護費用の増大などの問題が起こります。健康で元気に過ごせれば、自宅で生活できますが、もし、ひいおばあちゃんが98歳で動けなくなり、施設に入っていたとしたら、どのくらいのお金がかかったのでしょうか。ひいおばあちゃんは、98歳まで生きたので、28年間、月15万円かかるとして、計算してみると、5040万円かかるということが分かりました。施設で生活するのに、こんなにも多くのお金が必要になるなんて。とても驚きました。そういう気持ちになってしまいうのもわかるような気がします。

みなさんは社会保障制度というものを知っていますか？これは全ての国民が質の高い教育や医療、社会保障を受けることができるものです。この

社会保障制度の充実度ランキングの一位のデンマークは、高齢化対策モデル国ともいわれています。デンマークでは、消費税25%、所得税50%と少し高いですが、その分、医療費や出産費がほとんど無償になります。社会福祉に関わる財源を全て税金で賄っているところが日本と大きな違いです。日本はデンマークほど若者がいないので、若者の負担が大きくなるため、デンマークのようにすることは難しいです。ですが、施設に入りやすくするなどの高齢化社会をみんなで受け入れようとすることは可能ではないでしょうか。例えば、介護費用を安くしたり、市から助成金を出していただいたり。そして、たくさんのおじいちゃん、おばあちゃんが入るとそれだけの介護士の人も必要になります。今、介護士の人手不足が問題となっています。人手不足の原因として、介護士の年収は約400万円と給料が低く、夜勤があること、精神的にしんどいということが考えられます。私の学校で、去年、職場体験がありました。福祉施設を希望する人が少なく、マイナスに捉えている人が多い印象でした。なので、「介護士」の評価を高め、給料や夜勤手当を上げることで、さらに高齢者にとって居心地のよい地域、国になっていくと思います。

では、私たちは何ができるのでしょうか。私は、高齢者を受け入れ、助け合うことが必要だと思います。例えば、どこかで困っているおじいちゃん、おばあちゃんを見つけたら優しく声を掛け、手を差しのべる。そして、私たちがいつかおじいちゃん、おばあちゃんになったときに、声を掛けてもらう。そういったサイクルができれば、高齢者と若者とが手を取り合って、共存していくことができるのではないのでしょうか。みんなが、高齢者を受け入れ、温かい社会をつくっていきましょう。



今の選択、彩る未来

岐阜県各務原市立中央中学校三年

松島 帆乃佳

「進路希望調査」。

中学三年生になり、第一回目のこの用紙が配られました。いよいよ、自分の進む道を自分で決めることが現実味を帯びてきました。

私はなんのために勉強をしているのでしょうか。より高いレベルの高校や大学に進むため。良い職に就くため。良い収入を得て、不自由のない生活を送るため。それらしい理由ならいくらでも思い浮かびます。しかし、どうしてこんなにも勉強を頑張っているのか、分からなくなる時があります。現在にいたるまでの私は、義務教育や親が決めてくれたことなど、目の前に敷かれたレールを何の疑問をもつこともなく歩いてきました。

この「進路希望調査」をきっかけに、わたしは友人と進路について話すようになりました。ある友達は、

「メイクに関わる仕事に就きたいから、高校はまず経済を学べる所へ進学したい。」

と迷いなく話していました。また、別の友達は、

「福祉科がある高校に行きたいと思ってるよ。介護士になりたいから。」

と自分の夢を語っていました。私と違い、すでに自分の目標を見つけ、それに向かっていく進路をしっかりと考えている友達。偏差値だけで志望校を決めようとしていた自分が恥ずかしくなり、それと同時に不安が芽生えしました。人生を左右するかもしれない大きな選択を、私はこんなに簡単に決めているのか。

そんな悩みを抱えたままのある日、近くに住む祖母を訪れる機会がありました。「よく来たね、何か食べる？」といつも通り明るく迎えてくれる祖母。そんな祖母には、十年以上続いていることがあります。それは、「詩吟」です。詩吟とは、和歌や漢詩を特有のメロディにのせて読む、日本の伝統的な芸能です。私も小学生の頃、祖母に誘われて習っていたことがあります。先生や生徒に囲まれて詩吟をする祖母は、いつも楽しそうでした。いくつになっても好きなことを見つけ、今でも大会に出て堂々と詩を吟じている祖母は、とても格好いいです。好きなことに励む姿は、進路に迷う今の私には特に眩しく見えます。それと同時に羨ましく思うのです。私も夢中になれるものが欲しい、目指すものを見つけないと。

そんな時、学校で国語科の先生から、学生の時の進路選択について聞くことができました。

「どうして国語科の先生になろうと思ったのですか。」

という質問に、先生はこう答えました。

「高校生の時は理科にいたので、国語の授業は少なかったです。でも、国語はおもしろかったので、力を入れて勉強し続けていました。だから、大学を選ぶときに数学科と国語科も考えていたのだけど、最終的に教育学部の国語科に合格できたんです。そこで学ぶにつれて、国語の奥深さに気づき、どんどん夢中になっていきました。今もそうです。国語を教えることは難しいですが、国語を生徒と共に追求できる仕事ができ、楽しく過ごせています。」

そして最後に言いました。

「高校生の時に、国語をたくさん勉強しておいて、よかった。」

その言葉は今の私の心に大きく響きました。先生は、高校生の時にそこまでの必要がなかった国語を、おもしろいからするという選択をし続けたのです。そして、今でも夢中になれる「国語」の存在に気づいたのです。きっと、理数科にいた頃の先生には、自分が国語の教師になり、生徒と共に国語を追求している未来など、想像もつかなかったと思います。

いつか出会う、夢中になれること。何気なく好きだと思っていたことが、いつか将来につながっていくこと。祖母や、先生の姿は今の私の選択のヒントになる気がしました。

私は何のために勉強をしているのでしょうか。今ならはっきりと言えます。それは、自分の選択を制限しないためです。この先絶対に譲れないものを見つけたときに、ためらいなくスタートダッシュするための準備です。自分の夢を掴んだときに、勉強しておいてよかったと笑える未来のための、土台づくりです。

今、もし自分の選択に迷いがあるのなら、自分にできる身近なことから始めてみませんか。鮮やかな未来を描くために。



より良い未来のために

岐阜県各務原市立桜丘中学校三年

岩崎 葵

誰かが投票してくれる、自分が一人投票したところで何も変わらない。みなさんは、選挙に対して、そう感じたことはありませんか

先日、桜丘中学校では前期生徒会選挙が行われました。桜丘中学校では、二日間の選挙期間中に自ら投票所へ足を運び、投票をします。前回の選挙の投票率はほぼ百パーセントでした。では、令和四年七月に行われた参議院議員通常選挙の投票率は何パーセントだったと思いますか。生徒会選挙と同じように行われたその選挙の投票率は、約五十二パーセントでした。つまり、全体の半数近くの人は選挙に参加していません。特に低かった二十代の投票率は、約三十七パーセントでした。約三人に一人しか投票しなかったことになりました。私は、これを知ったとき投票率の低さに驚きました。みなさんはどう感じたでしょうか。

投票率が低いと、一部の支持だけで当選できるようになります。政治が一部の人の考えのもと行われることになるのです。平成二十八年度に、投票権を持つ年齢が二十歳から十八歳に引き下げられました。それでも、若者の投票率は低いままです。今後も投票率が下がり続けたら、若者の意見が反映されづらい社会になってしまいます。

では、なぜ選挙に行かない若者が多いのでしょうか。それは、忙しくて面倒だったり、候補者のことをよく知らなかったりするからだと思います。一人一人の意識の低さが、幅広い年代の意見がバランスよく取り入れられにくい社会につながっているのです。

先日、行われた生徒会選挙で私の友達が立候補しました。彼女は「自分たちで明るい笑顔のあふれる学校をつくりたい」という願いをもって立候補しました。「生徒会長に立候補して特に大変だったことは、朝早くから選挙活動することだった」と話してくれました。私も彼女を応援するため、朝に行われる選挙活動に参加していました。選挙活動では、強い願いをもつ立候補者を多くの人が本気で応援していました。私も友達が生徒会長になってほしいという思いで、応援しました。全ての立候補者が同じ学校で過ごす仲間のことを考えて立候補していましたが、それぞれ公約

の内容は異なりました。私は、誰がリーダーになると学校がより良くなるかをよく考え、何度も公約に目を通して投票しました。生徒みんながそうしたから、この選挙は百パーセント近い投票率になったのだと思います。

社会の代表を選ぶ選挙も同じではないでしょうか。学校の生徒会選挙でも、各候補者の願いも応援する人の願いも強いものでした。私たちも選挙に真剣に向き合うべきです。もしかしたら自分が望まない願いをもっている候補者もいるかもしれません。だから、私たちは見極める必要があります。私たちが一票を入れる候補者は、私たちの社会のためにどんなことをしてくれるのでしょうか。私たちは、私たちの社会をより良いものにしていくために投票するのです。投票率百パーセントということは、全ての人の意見が反映され、全ての人のためになる選挙が行われたということです。それは、今の社会が目指すべき姿でもあります。

現在の日本では、当たり前に選挙権が与えられます。しかし、それが当たり前ではない時代もありました。より良い未来のために、自分に与えられる権利の大切さをよく理解しなくてはなりません。私は、このままでいいはずがないと思っています。

私たち中学生に選挙権が与えられるのは数年後ですが、選挙について知ることはいくらでもできます。例えば、選挙のニュースを見ることがです。選挙や地域について知れることは、数年後に私たちが投票するときに役に立つはずです。十八歳になって選挙権が与えられた時に、候補者の公約を理解できるように私は今から日本のニュースや課題に関心をもとうと思います。

誰かが投票してくれる、自分が一人投票したところで何も変わらない。そんな考えもあるかと思いますが、では、投票していない人には政治に対する考えが何もないのでしょうか。私はそんなことではないと思います。私たちに選挙権が与えられているということは、政治に声を届けられるということなんです。投票しなくても何も変わりません。一票を入れることに意味があります。

誰かが投票してくれるから、投票しなくて良いのでしょうか。誰かがではありません。私たちがこれから生きていく社会に、幅広い年代の意見を届けましょう。



思いやりで世界を変える

岐阜県各務原市立鵜沼中学校三年

ダーリンプル 才門

お店に入ると、時々嫌な顔をされる。私がイギリスと日本のハーフだからだろう。茶色の髪と白めの肌。そんな風貌だけを見て、「日本語が話せなさそう」と思ったのだろうか。

このような出来事は時々ある。これが差別なのだろうかと感じる。人間にはいろんな特徴がある。勉強が苦手、話すことが苦手、けん玉が得意、本を読むのが好き。いろんな人がいる。その中で私は、ただハーフという特徴を持っているだけだ。私は確かにイギリス人でもある。しかし日本で生まれ育ってきて、日本のことが大好きだ。その理由は、自分のことを受け入れてくれる友達がいるからだ。自分の髪が茶色で、みんなとちがうことに嫌だと感じることもあった。そんな時、私の髪のこと、ハーフであることに「いいじゃん。」と言ってくれた友達がいた。この一言に、私を受け入れてくれていると感じた。見た目の違いはあっても、同じ人間であり、そこに違いはないはずだ。それなのになぜ日本人、それ以外という「壁」をつくりたがるのだろうか。

日本に観光に來たい外国人は多いが、日本に住んでいて「住みやすい」と答えた外国人は少ないと聞いたことがある。それは冒頭の出来事で私が感じたような、日本人との「壁」を他の人も感じるからではないだろうか。その「壁」をなくすことができれば、外国人やハーフの人が住みやすい社会、誰もが住みやすい社会になると思う。

もちろん、嫌な顔をしてくる人ばかりではない。優しく対応してくれる人もいる。買い物に行ったときのことだった。イギリス人であり日本語を使えない父親が先に会計をしていた。店員さんは父に頑張って伝わるように話していて、父もそれを頑張って理解しようとしていた。お互いが嫌な顔ひとつせず、相手のことを思いやった行動だった。すると私の兄が店員

さんの言葉を翻訳して父に伝えていた。そして二人とも兄に「ありがとう。」「Thank you.」と言った。そこに日本人と外国人との「壁」なんてなく、見ていた私の心はとても温まった。

家族の会話では、英語を話す。父が日本語をあまり理解できないからだ。私は自分の伝えようとしていることを英語で表現できない時がある。そんな時、誰も怒ったり、せかしたり、嫌な顔をしたりせずに、真摯に話を聞いてくれる。その家族の思いやりの気持ちが私の心に深く残っている。思いやりの大切さを教えてもらった。

今の日本にはまだ「外国人お断り」と書かれた張り紙を見かけることがある。このような事実はなぜあるのだろうか。最も大きい理由として、日本人は外国人を恐れていると感じる。日本はアメリカなどに比べれば日常生活の中で外国人とふれあう機会が少ない。そして、入る情報はニュースになっているテロ事件などのようなものばかりではないか。これでは日本人が外国人を恐れてしまうのも当然ではないだろうか。外国人を「知らない。」「知らない」から恐れて、「知らない」から差別する。それはきつと、「外国人」や「ハーフ」に限ったことではない。その人自身に目を向けて一人の人間として接していくことこそ、大事なのだと思った。

これから大人になり、社会に出ていろんな人と関わっていくことになる。そんな時こそ、「思いやり」を大切にしたい。私は、どんな人に対しても態度を変えずに「思いやり」の気持ちをもって接していきたい。そして私の周りに困っている人がいたら、積極的に話を聞く。辛さをかかえている人には、手を差し伸べ、支えていく。こうして「思いやりの輪」を広げ、人と人との「壁」をなくした社会を創っていきたい。一人一人の「思いやり」を行動にうつす。それが世界を変えていく。そう信じている。



夢への第一歩

岐阜県各務原市立川島中学校三年
伊藤遙花

「将来の夢」は何ですか? 「夢を叶える為にどんな「進路計画」を考え
ていますか?」

中学生になってから、「夢」「進路」「高校」といった言葉を聞く機会が増え
た。進路について考える授業、三者懇談:様々な場面で将来の自分の進む
道を尋ねられる。友人の一人は「進路って言葉を聞くとプレッシャーを感
じるよね。」と言う。

私の将来の夢は、「イラストレーター」になること。頭の中で思い描いた世
界をキャンバスに表現している時間が何より幸せだ。ある日、「鮮やかな空
を優雅に泳ぐ一匹の鯨のイラストに出会った。その瞬間から、透明感のあ
る色彩のその絵に心が惹きつけられた。学校であった出来事、将来への不
安、何もかも忘れてしまうようだった。その絵と出逢ってから「誰かの心を
動かすような、日々の楽しみになるような、そんな絵を誰かに届けられ
たらどれだけ幸せだろう。」と考えるようになった。しかし、イラストレータ
ーになる夢を叶えるために、どここの高校へ進学し、何を身に付けるとい
かを考えることはなかった。

そんなある日、勇気を出して両親に「イラストレーターになりたい」とい
う夢を話した。すると両親から、「絵を仕事にして食べていける人なんて
ほんの一握り。収入も安定していないから、安定して稼げる公務員の方が
いいんじゃないかな?」そんな言葉が返ってきた。「確かに。現実味のない
職業なのかな。」と思い、言い返すことなどできなかった。

中学二年の春、母の勧めで「画塾」という絵を専門的に学ぶ塾へ通い始め
た。そこには、私と同じように、美術科の高校や大学を目指している人が
たくさんいた。磨き上げられたデッサン、緻密な構成、深みのある表現に
圧倒され、日々のレッスンに励んだ。明暗、色彩、構図、パース、プロポーシ
ョン:覚えることは多岐に渡る。私にもたしめている間に、ほかの塾生
はどんどん上達していく。うまくなるためには、時間も努力も必要不可欠
なのだと思えた。そして、両親が反対する理由にも納得した。「イラスト
レーターへの憧れ」だけで、夢が叶えられるほど簡単な世界ではない。「絵
がもつとうまくなるにはどうしたらいいだろう。」「今の私には何が必要だ
ろう。」「画塾に通い始めたことで、ただ何となく考えていた将来の進路と、
しっかり向き合い始めた。

その頃、夏休みの宿題で「進路計画」を立てることになった。「私の人生
なのだから自分で考えて決めよう。」と決意した。そして、こう決めた。美

術科の高校へ進学し、大学へ進学する。大学卒業後イラスト関係の会社に
就職をして数年で技術を学び、独立してプロのイラストレーターとして活
躍する。進路計画を立て終えた後、心がすっきりしているのを感じた。将
来の不安より「今、自分が何をすべきか。」が明確になった。自分の将来
を真っ白なキャンバスと例えると、そこに「こんな絵を描くんだ」と決める
すると、どんな色を選んだらいいか、どんな画材を選ぼうか明確になる。
そんな感じだ。

そして、中学二年生ながら、美術科のある高校見学にも参加した。一言
で「美術科」といっても、決められた画法を学ぶだけでなく、様々な専攻を
自ら選べることを知った。在校生の作品はどれも私の心を打つものばかり。
バクバクと高鳴る鼓動を抑え、家に着き、すぐに両親にこう話した。

「将来、イラストレーターになるよ。だから、そのために、まず、美術科の
ある高校へ進学させてほしい。絵についてももっと勉強したいんだ。私の進
路計画はね:「進路計画を語り終えると両親は、「あなたの夢を叶えるの
は簡単な道のりではないことは分かるけど、応援するよ。」そう言うて寄
り添ってくれた。

この経験から、進路選択をするときに大切なことは、将来の自分を明確
に描くこと、その夢が確かなものになるようにとにかく行動することだと思
う。遠いと思っていた未来は、案外近くにあるのだ。

まだ見ぬ未来を想像することは苦しいと感じる人もいるかもしれない。
夢があっても、「そもそも自分にできるのか」「不安に感じる人もいるかもし
れない。しかし、だからといって自分の未来を諦めたくない。私の未来は私
しか切り拓けないのだ。未来から目を背けずに向き合う覚悟を持つとう。
そして、小さくてもいいから、行動をしてみよう。画塾に通うこと、コッ
ツ絵の努力を始めたこと、高校見学へ行ったこと。そういった一つ一つの行
動の先に、今の私がいる。

将来への不安がないと言われれば嘘になるけ
れど、心の中は不安より期待や希望にあふれ
ている。「夢への第一歩」を、私は、私の足で踏み
出し始めた。



一番大切な存在

岐阜県各務原市立那加中学校三年

大前 敦哉

私の祖母は認知症だった。私が小さい頃とは違い、物忘れが激しく、急に怒鳴るようになってしまった。次第に認知症は悪化していき、家族の名前さえも忘れるようになってしまった。私が初めて祖母が認知症であることを知ったときから、祖母とは距離を置くようになった。いつ怒鳴られるかわからない。そんな不安を感じながら祖母と接するのはあまりに辛かったからだ。もう昔の優しい祖母はいないのか。そう感じるようになってしまった。今思えば、これらは単なる偏見に過ぎず、大切な祖母に対して絶対にしてはならない行動だった。しかし、当時の私は認知症に対して無知だったため、偏見を抱き続け、距離を置くことしかできなかった。

中二の冬、祖母は肺炎を患った。これは祖母にとって二度目の肺炎であり、入院してからそう長くはなかった。祖母はみるみる衰弱し、やがて無数の管がつながれ、しまいには会話もできない状態になった。それでも必死に呼吸し、何としても生きようとする祖母の姿を見た時、私は初めて人の死を悟った。その日の夜、病院からのキトクの電話が入り、病院に着く頃にはもう二度と話すことができなくなった。呼吸をしていない祖母の身体。徐々にぬくもりが消えていく手足。病室に響き渡るアラーム音。初めて人の死を、祖母の死を実感したとき、私が今までずっと祖母との距離を空けていたことが、祖母に対する差別だったことに気付いた。その瞬間、私はひどく後悔した。しかし、どれだけ涙を流しても、私の自責の念が消えることはなかった。

久しぶりに祖父母の家に行くとき、祖母の寝ていたベッドの上に、昔、私がかいた祖母への手紙が大事に残されていた。その後、祖父から、ずっと私のことを誇りに思い、祖母の友達に自慢気に話していたこと。ずっと私のことを思い心配してくれていたことを聞いた。今まで、祖母は私のことを

ずっとずっと大切に思ってくれたのだ。それなのに、私は祖母とコミュニケーションをとらずに距離を空けていた。私は祖母を差別していただけでは、祖母の優しさや愛情をも無視してしまっていたのだ。「自分がもっと祖母に話しかけておけばよかった。」私の心はまたも後悔でいっぱいになった。

それから私は、これまで以上に家族との時間を大切にしている。もう二度と同じ後悔をしないために。

私たち学生は勉強や部活で家族との時間を大切にすることはなかなか難しい。ましてや、家族に優しく接することが気恥ずかしいと感じる人も少なくはないだろう。しかし、私たちが悩んだ時、つらくなったときにいつも支えてくれるのは家族だ。だからもっと家族との時間を大切にしたい。今の気恥ずかしさなんて大事な家族の時間を考えたらとても小さなことだ。家族との時間は永遠に続かない。突然終わってしまうことだってある。私のように二度と話せなくなってしまうからでは、会えなくなってしまうのは遅いのだ。正直私だって素直になれない時がある。でも限られた時間を今よりもっと充実させるためにも、家族との時間を、今も、これからも大切にしたい。

私自身、祖父や両親と食卓を囲み、団らんを作る機会は少ない。それでも、祖父と一緒に会話したり、母や父と他愛もない会話をしたりして、日々充実した生活を送ることができている。また、私が人間関係で悩んでいた時に優しく相談に乗ってくれたのは他でもない、私の家族だった。

一番大切な存在。これからの人生いろいろな人に出会い、成長していき、いずれ自分の力で生きていくことになる。それでも、家族が私を想ってくれるように、私も家族をいつも想い生きていく。



なりたい自分になるために

岐阜県各務原市立緑陽中学校三年

羽沢 健瑠

「右手がない人でもバスケットボールはできる」あなたはそう思いますか。僕は「できる」と信じて、小学一年生の夏にバスケットボールを始めました。最初はもちろん、できないことが山ほどありましたが、チームメイトが側で支えてくれたり、父が毎朝一緒に練習してくれたおかげで、シュートやドリブルテクニクなど、今までできなかったことが徐々にできるようになっていき、次第にボールを自由に扱えるまで成長することができました。当時の僕は、自分が成長していくことが嬉しく、バスケットボールが楽しくて仕方がなかったことを今でも覚えています。

しかし、学年が上がるにつれ、チームメイトの実力は徐々に上がっていき、自分とチームメイトの間に大きな実力の差を感じるようになりました。同学年や後輩のチームメイトが自分よりも評価され、活躍している姿をただ見ていることしかできない自分に対して、心の底から嫌悪感を感じていました。バスケットボールをするたびに、自分が積み上げてきた自信が崩れ落ちていく日々、「右手がなくてもバスケットボールはできる」そう思っていたはずなのに、それは次第に「自分は周りの人とは違う」「自分にはバスケットボールは向いていない」という考えになったのです。いつしか僕にとってバスケットボールは辛いものに変わっていました。

それでも僕は、バスケットボールを続けました。自分がなりたい自分になることを諦めなくなかったのです。周りの実力の差があっても、心の底では「自分なら右手がなくても何でもできる」そう信じ続けていたかったのです。自分の可能性をゼロにするのは、絶対に嫌だったのです。「できる」「できない」そんなことは考えず、僕は努力をし続けました。練習は自分のできる全力で取り組んだ。コーチに怒鳴られても、それを成長できるチャンスだと考え、受け止めた。自分の課題を見つけるために、試合のビデオを見て父と一緒に研究をした。そうやって努力し続けた結果、僕は再び成長し、今ではバスケットボール部のキャプテンを務めるまで実力をつける

ことができました。

もちろん、まだまだ実力が足りていない部分が多いですが、小学生の頃になりたい自分になることを諦めず、努力し続けたことが、今の僕の大きな自信になっています。バスケットボールと出会い、本当の意味で自分のことが好きになれた。受け入れられた。自分は自分でいいのだと思うことができました。

そんな自分になれたのは、時には立ち止まっても、自分の可能性を信じて前を向いて進み続けることができたから。前を向いて進み続けることができたのは、家族やコーチ、チームメイトが側で支えてくれたからです。バスケットボールを通して、右手がないことは僕に欠けていることではなく、僕自身のかけがえのない「個性」であると思うことができました。

人には、それぞれなりたい自分と、それを現実させるための無限の可能性がある。僕はそう考えています。とはいえここで「諦めなければ必ずなりたい自分になることができる」そう主張するのは無責任でしかないと思います。僕自身も、これまでの人生の中で努力してもできないことはたくさんあったからです。しかし、たとえそうだったとしても、なりたい自分になることを諦めないでほしい。挑戦し続けても、なりたい自分になることができないこともあるかもしれない。でも、なりたい自分になることを諦めない限り、可能性がゼロになることはありません。僕と同じように、目標に向かう道のりの中で、辛いことや苦しいこと、もうやめたいと思うこともあると思います。しかし、あなたがなりたい自分になるために必死に努力し続けてさえいれば、その姿を見てあなたを支えてくれる人は必ず現れます。自分の可能性を信じて、前を向いて進み続ける。それが、なりたい自分になるための大きな一歩になると、僕は信じています。

最後にもう一度、あなたに問います。「右手がない人でもバスケットボールはできる」あなたはそう思いますか。



方言っておもしろい！

岐阜県各務原市立蘇原中学校三年

古川 莉久

ある、音楽の時間のこと。合唱練習をしていると、音楽担当の田中先生から、こんなことを言われた。

「岐阜弁はすぐ特徴があるんだけど、みんな気付いているかな。まず、語尾が伸びやすい。何とかでしょーとか、何何しまーすのように。それから、イントネーションにずれがある。例えば、「ありがとう」を「ありがとう」と言うでしょ。これ、岐阜弁の特徴。それから、「て」で「け」「げ」の発音が汚い。自転車を「じでんしゃ」っていったりすることない？だから歌う時に、強くなつてはいけない所で強く歌ってしまったら、短く歌うところで長く、長く歌うところで短く歌ってしまったら、短く歌うんだよ。これは、方言が関わっているんだよ！だから、歌うときは、標準語を意識して歌わないと、発音がずれてしまうんだよね。」

えっ、岐阜弁が歌い方に関係するの？岐阜弁って汚いの？僕たちが話している言葉は標準語ではないの？と、僕にとつてはかなり衝撃の事実を聞いた時間だった。

そもそも、方言って何だろう。三省堂現代学習国語辞典によると、「方言」とは、ある地方でだけ話される言葉である。」とあった。また、lexi.jp/japan.jpというインターネットサイトによると、方言が生まれた理由には二つあるそうだ。一つ目の理由は、都の言語が地方へ伝達したからで、言葉は、都やその地域の文化の中心で生まれ、地方へと伝わっていく形で広まったが、都で使わなくなった言葉が地方で生き残り、その言葉が地域に定着することで方言が生まれたと考えられているそうだ。二つ目の理由は、地域でそれぞれ独自に発達したからで、昔の日本は、いくつかの地域が一つの国として運営されており、交通の便の悪さから外からの情報が入りにくい状況にあったため、その地域で流行った言葉が定着し、独自に発展したことで方言が生まれたと考えられているそうだ。方言は何もない所から生まれたわけではないんだ。

そんな中で生まれた岐阜弁。では、岐阜弁にはどんな言葉があるのか。えらい、机をつる。意外に思いつかなかった。どれが岐阜弁なんだろう。そういえば、とおばあちゃんとの会話を思い出してみた。朝、学校の準備ができてない時に、「はよ、まわししやあ！」と言っていたり、近所の人に言われた言葉に対して、「こがわくわあ」と言っていたりした。みなさん、これらの言葉の意味は分かりますか？「はよ、まわししやあ」は、「早く準備をしない」「こがわく」は「イライラする」という意味なんです。クラスのみんなにも知っているか聞いてみたら、僕と同じで、えらい、机をつる、という方言を知っている人はほぼ100%だった。でも、「こがわく」については、使ったことがないのはもちろんのこと、知っている人すらいなかった。僕も

使うし、よく聞く言葉の中で、語尾に「何何やお。」という言葉があるが、これは8割の人が使っている。このグラフからも分かるように、岐阜弁でもよく使われている言葉とあまり使われていない言葉があることがわかった。

僕はあまり思い浮かべられなかった岐阜弁。でも、こんな言葉も岐阜弁だよ、と聞くと、それもそうなのか、と知っているものが多いのが現実だ。きつと気が付かないうちに当たり前に使っているからなのだろうなと思つた。

そんな岐阜弁も、他の地域の方からしたら、いろいろな印象をもたれると思う。僕が「方言」と聞いて一番に思い浮かぶのが「大阪弁」だ。僕は、大阪にいる友達のと遊びに行ったことがある。テレビで関西の芸人さんが話すのをよく聞くし、吉本新喜劇を見ることもあるので、岐阜弁以外では、大阪弁が一番聞き慣れている気がする。僕にとつて大阪は賑やかで楽しそうな場所だけど、ちよつと言葉がきつい、怖そうなイメージがあった。実際に行ってみると、たくさんのお店が並んでいるところからは、楽しそうに話をする地域の方の声が聞こえてきた。

「おにちゃん、どつから来たん？」

その声をかけてくれるお店の人の話しぶりがとても親しみやすかったのと同時にすごく勢いがある。

「岐阜です！」

とすぐに答えられた。他の所でも話をしたが、実際に話をしてみると、テレビで聞いているのと同じようなイントネーションで、自分たちの話し方とは違うな、と思うと同時に、大阪弁はあまりかしこまった言い方ではないから、人と人との距離が近いなと感じた。

この経験からも、方言は地域ごとに特徴があつて面白いと思った。その地域の文化に触れている気分にもなる。自分の周りもそうだし、大阪で聞いた時もそうだったけど、大人も子供も、その地域の人はみんな同じような話し方になる。僕も家族や友達、地域のひとと話す中で岐阜弁が当たり前前に身に着いた。ただ、社会に出た時には、誰にでも伝わる標準語を使う必要があると思う。また、音楽の田中先生がおつしやつていたように、標準語を使うことで良さが生まれることもあるので、標準語もちゃんと覚えておきたい。ただ、岐阜人として、使つてもよいときと使わないほうが良いときの区別をつけながら、親しみのある「岐阜弁」をこれからも使っていきたい。

「みなさん、今日はありがとね。」



私の平和、みんなの平和

岐阜県各務原市立中央中学校三年
青木 ひなの

「もし、父になにかあったらどうしよう。」
「帰ってこれなくなったらどうしよう。」

そのころ、私の頭の中では、悪い想像ばかりがふくらんでいました。

自衛隊である私の父は、昨年の十月中旬から十一月中旬の約一カ月間、ヨルダンへ派遣されました。そのとき隣国のイスラエルは、まさに争いが始まるうとしている時でした。そこから避難したい日本人などを支援するために、父は現地へ向かったのです。父は争いに参加するわけではありません。しかし、イスラエル、パレスチナの情勢が非常に緊張しており、「限られた時間で現地から日本人などを避難させなければならない。」という重責を、任務の際に感じていたそうです。

私は父が海外へ派遣されてから、毎日のように連絡を取り、父の安全を確認していました。不安と恐怖でいっぱい毎日でした。いつもよりほんの少し父からの返信が遅いだけで心配になり、すぐにもう一度連絡をしてしまうほどでした。

今、この世界ではたくさん争いが起きています。中でも、ロシアとウクライナや、ガザ地区での戦闘は皆さんもよく知っていると思います。父の派遣をきっかけに、私は戦争について深く考えるようになりました。

派遣から一カ月後、ついに父が帰国しました。その時、私は言葉で表せないくらい安堵し、うれしさがあふれてきました。何より父が、傷一つなく、無事に帰ってきてくれたことに、感謝の思いが込みあげてきました。その感覚は、今でも忘れません。当時七歳だった弟は、父が家に帰ってきたことに気づくと、すぐさま父にとび付いていました。

しばらくして落ちついた後、

「海外へ派遣されて大変だったことは何。」

と、私は疑問に思っていたことを父に聞いてみました。すると父は次のように答えてくれました。

「イスラエル情勢が不安定な中、慣れない環境で任務することは大変だった。派遣されている仲間と共に与えられたミッションの対応策を検討したり、実施したりすることにとっても責任を感じていた。」

この言葉から、どれほど現場が過酷な状況だったかが分かります。家族と離れ、いつ日本に戻るか分からない状況は、精神的に負担だったそうです。父の話を聞くにつれ、争いのまっただ中にいるイスラエルやガザ地区の方々は、私の想像も及ばないような、とてもひどく過酷な状況にいること

が感じ取れました。水が飲める、電気が付く、家族と話せる、そんな私たちからすると当たり前の日々も、今、戦争のまっただ中にいる方々からすると夢のような日常です。

テレビやネットでは、連日戦争のニュースが報道されています。ある時、私はウクライナのある親子取材したニュースを目にし、目が離せなくなりしました。画面には、戦争に行く父を待つ少女の姿が映っていました。少女は、私と同じ十四歳です。彼女は、戦争に行つては戻ると、再会と別れの日々をずっと繰り返ししていました。父が戦争から無事に戻ってきた時は、二人は幸せをかみしめるようによりそい、父が戦争に行つてしまう時は、彼女の表情は悲しきと不安であふれていました。状況は違いますが、あの時、父の帰りを不安いっぱい待っていた自分と、その少女の姿とが重なり、胸がしめつけられました。

誰もが平和に暮らす権利を持っています。しかし、この世界では「誰もが平和に」ということがまだ実現していません。皆さんも、今のウクライナやガザ地区の大変さはよく知っていると思いますが、こうした現状をどこか他人事のように捉えている人も、中にはいるように私には感じられるのです。でも、もし自分が戦争のまっただ中にいる人々の立場になったら、助けを求めたくありませんか。私は今、世界の争いを他人事として見ず、自分事として捉え、ささいなことであっても助け合える世の中にしていきたいと強く思っています。「私たちにできることなんて……」と思う人もいるかもしれませんが、でも、現地の人を思って募金をしたことがある人は、きつと多くいると思います。戦争について学び、知ろうとすることも私たちができることのひとつです。相手の立場になって一つ一つ積み重ねていけば、それは大きな力になっていきます。

父は私に、想像できないくらい辛い世界の戦争について教えてくれました。父の経験聞いた日のことを、父の帰りを不安いっぱい待ち続けた日々のことを忘れず、たとえ国が違っても、どれだけ遠くにいても、相手に起きたことを自分事として考え、行動していけるようになりたいです。そして、この世界で生きる一人として私は、誰もが平和に暮らせる世の中を強く願い、小さなことでも助け合える、お互いの立場を尊重し合える日々を、一步一步積みあげていきたいです。



見つけよう、楽しさ。広げよう、世界を。

岐阜県各務原市立蘇原中学校三年

萩原 侑香

こんにちは、Hello, Hola, Bonjour, Ciao, Hallo, Привет, 你好。私は蘇原中学校三年生の萩原侑香です。

私は、小学四年生の終わりに、母に「英語を習ってみたら。」

とすすめられ、英語を勉強し始めました。初めは、英語の勉強が本当に嫌でしたが、「ピザ」を「pizza」と発音することが面白い!と思ったことをきっかけに、英語を学ぶことが楽しくなりました。また、小学校の英語の授業のリスニングで、それまで何を言っているのか全くわからなかったのに、「言っていることが分かる!」と思う瞬間があり、そこからさらに、英語が楽しく、好きになりました。もっと英語に関わることがしたい!とも思うようになりました。

そして、中学一年生のとき、待ちに待ったチャンスがやってきました!姉妹都市であるセリトス市との、オンライン交流会です。これが私にとって初めての他国との交流で、本当に楽しかったです。この交流会を通して、私は他国の文化に興味をもつことができました。交流会の後、「来年は交換留学があるかも」という情報を耳にした私は、実際にこの目でアメリカを見てみたい!現地の人と英語で話してみたい!だから絶対に参加したい!と思いました。翌年、広報で各務原市中学生海外派遣の募集を見つけたときは、ついにこの時が来た!と思い、すぐに応募しました。私の強い思いが通じ、派遣団に選ばれ、令和五年十月三十日、私は初めての海外、アメリカへ向かいました。

アメリカでは、文化の違いを、身をもって体験してきました。その中で感じたことは、何もかもが大きいということです。バスが大きい、看板が大きい、信号機が大きい!特に驚いたのは、お店で出される飲み物のサイズです。どのお店でも、このぐらいのサイズで出されるので、本当に驚きました。また、行った時期がハロウィンと重なっていたため、本場のハロウィンを体験することができました。そこでは、アメリカの人たちの、イベントに対する本気度も実感しました。どの家も、個性的な、飾り付けがされており、ある家では、大きな骸骨が動いていたり、棺桶から人が飛び出してくる!なんてこともあり、街中、本当にお化け屋敷のようでした。私は、ホストフ

ァミリーと一緒に、「トリックオアトリート!」と言いながらたくさんのお菓子を回り、バッグいっぱいのお菓子をもらいました。日本では仮装して楽しんでいる人たちを見ることはあっても、自分の家を飾り付けたり、お菓子をもらって歩き回るなんてことはしないので、本当に圧倒されました。現地の人たちのテンションに、終始押されっぱなしで、一生懸命練習していた英会話は…聞き取るのがやっとで、ほとんど話せませんでした。もっと練習して、もっとコミュニケーションが取れるようにしたい!と思いました。

研修中に、「NIS America」という各務原市に本部のあるゲーム開発会社へ行き、様々なことを聞きました。その中で、私が特に衝撃を受けたのは、面白い、と思うポイントが国によって違ったり、同じ言葉でも伝わり方が違うので、日本で売れたゲームだからといって、ただ翻訳しただけでは売れないことがある、ということです。私は、こんな所まで文化や価値観の違いがあると知り、本当に驚きました。

このように、私はアメリカ研修を通して、様々なことを知り、自分の世界が広がった気がします。今度は自分の力でアメリカだけでなく他の国にも行ってみたい、そして沢山のひとと話せるようにになりたいという気持ちが強くなりました。そのために、私は今、今まで以上に英語の勉強を頑張っています。その他にも、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、中国語を、少しずつですが勉強し始めました。勉強している中で、スペイン語とイタリア語は発音が似ている、などの類似点や、日本語、中国語、英語以外の言語には名詞に性別がある、などの相違点が見つかり、とても面白いと思いました。

私にとって、新しいことを知ることは、とても楽しくワクワクすることです。私には夢があります。幼稚園の先生になりたい、世界中を旅してみたい、国際交流イベントに参加したい、運営したいなど、あまりまとまりがありませんが、世界中の沢山のひとと関わるようなことがしたいということが共通しています。いろいろな人と関わるには、知識、コミュニケーション能力など、必要な力が沢山あります。だから私は、もっと自分の世界を広げて、様々なことを学び続けていきます。これで終わります。Thank you for listening.



考えすぎな自分と向き合う

岐阜県各務原市立緑陽中学校三年

松井 暁音

「考えすぎだよ。」誰だったか忘れてしまったが、そう言われたことがあります。その時、何も言い返すことができませんでした。自分でもそう思い、納得していたからだと思います。何を考えるかという、人にどう見られているか、どう思われているかということ。そのせいで、自分で恥ずかしさを感じることもや、できないこと、苦手なことが多くあります。

この前、服屋に行ってみました。冬に入るので、上から羽織れる「ジャケット」を買おうとしました。ですが、見つかりませんでした。僕は、服屋へ行くことが少ないので、「ジャケット」の探し方が分からなかった。お店の中は、お洒落な人だらけで、自分が場違いだと思えてくるあの雰囲気。苦手だから、入ることが少ないのです。結局、目当てのものは見つけれませんでした。店員さんに聞こうと思いましたが、お洒落な人しか見当たりませんでした。僕は、そんな人達の前で、「ジャケット」と言おうとしているのです。そう考えるほど、「ジャケット」と言うのが恥ずかしくなりました。何か気取っているようで、口にできませんでした。店員さんの前に足が止まっても、待つて聞く勇気がでなかった僕は、一回、店から出てしまいました。少し帰ろうか迷いましたが、さすがに買わないのはまずいので、もう一度お店に入りました。僕は、店員さんを探しました。できるだけお洒落じゃない、シンプルな服装で自分が話しかけやすい人を探しました。そこまですらないと話すことができなかったからです。問題はその後で、やっぱり「ジャケット」と言えない僕は、「上から着れるもの」と聞きました。絶対、店員さんにおかしなやつだと思われた。ということを考えながら、足早に店から撤退しました。こんなことも言えないのかと、恥ずかしさと悔しさが込み上げました。

別の日、友達にその話をしました。意味が分からないと言われてしまいました。その友達にも言われましたが、僕のような気にしすぎる考え方をする人が、面倒臭い人と呼ばれているのです。世間にもこういう人はたくさんいて、僕も面倒臭い人だから、どうしてこんな考えになるのか原因は分かっています。僕も、その人達も、自意識過剰なんです。他人からどう

思われるのが気になる。言葉に発せられない。言葉にできたと思ったら、考え直して一人反省会を行うこともよくあります。こんな話を聞いて、まったく共感できない、または、笑えてくる、ありえないと思つた人達は、自分に自信をもっている人なんだと思います。その人達は、僕が日々考えて、疑問をかかえて悩んだり気にしたりなんかしないのでしょうか。僕は、服屋以外にも、カフェにも図書館にも飲食店にも、入りづらさを感じています。というか、入りません。だが、自信をもつ人達は何も感じず堂々と入っていきます。そんな人達とは違うのに、過ごしにくくないわけがありません。僕が会ってきた、自信をもっている人達は皆、「誰も君のことなんか気にしていない。」と言ってきましたが、そんなことは分かっているし、放っておいてほしいです。僕自身が勝手に気にしているだけです。しかし、この性格をやめたいとは思いません。

僕は、最近になって気づけたことがあります。外に出ることが嫌いで、外出を避けているんだと思っていました。嫌いなのは人に見られることであつて、外出自体は好きだということです。最初にしたのは散歩で、山や鳥を見ているとのんびりできるのが心地よくて、たまにするようになりました。今では友達と、キャッチボールをするようになりました。いい球を投げられると楽しいです。自分が避けていたものにこんな面白いものがあるなんて知らなかったし、そのおかげでいろんなものにふれてみようと思えました。

こんなことがあるから、この性格をやめたいと思いません。新しい発見をした時はとても熱中できてしまいます。感じたくやしさをバネに頑張ろうと思えることも、たまにならあります。だから、これからも自信をもっている人になろうとは思いません。自信をもっている人との共生を目指し、こんな自分を大事にしていきたいなと思っています。そして、自信がなくても、いつかは、「ジャケット」つて店員さんの目の前で、言おうと思います。



山は裏切らない

岐阜県各務原市立川島中学校三年

青井 汰樹

川島中学校の窓から望む伊吹山、御嶽山、木曽川…自然に囲まれた川島で生まれ育った僕には趣味があります。それは、山に登ることです。毎年、夏休みになると、父と兄と三人で日本アルプスに登ります。これまで、様々な山に挑戦しましたが、どの山も見られる景色、登頂までの道のり、感じるものが異なっています。僕は、どれも一生の思い出として心の中にしまっておくことにしています。

僕が、初めて登山に挑戦したのは、五歳の時。標高三〇〇mほどの金華山に、父と兄と三人で登頂を目指しました。当時の僕は、運動が大の苦手でした。舗装されていない山道、むき出しになった岩場、ごてごてとした石段。不安定な足場に、何度も足を取られそうになりながら、必死で父の背中を追いました。三十分ほど登っただけで、体力は限界を迎えました。「山登りなんかただ辛いだけじゃないか。何が楽しいんだ。」僕はそんな思いで、初めての登山を終えました。

七歳になった頃、「標高三〇〇〇m級の日本アルプスに登らないか。」と父に誘われました。五歳の頃に登った金華山よりも、十倍も高い。正直僕は、断りたかったです。でも、そんな僕の思いに気付いているのか、父は僕を説得するように「いいか。日本アルプスにはたくさんさんの発見があるんだ。そして、山頂から望む景色は最高なんだ。登り切った達成感を汰樹にも味わせたいんだ。」と語るのです。瞳をキラキラさせながら。「おいおいその手には乗らないぞ。だまされるものか。そんなに山頂の景色が見たいならロープウェイで登ればいいじゃないか。」と心の中でつぶやいてはみるものの、父の迫力に押され、首を縦に振ってしまいました。そして、気が付くと登山の日を迎えていました。

登山中、父は疲れなどを感じさせないような楽しそうな表情でした。ずっと「ここまできたら、もう少し頑張ろう。」と言葉をかけてくれていました。兄も、父よりずっと疲れていましたが、やはり僕に「山頂についたら

お菓子でも食べようや。」と言いながら、背中を押してくれてました。何度も何度も、二人から励ましの言葉を掛けられながら山頂を目指しました。やっとの思いで、着いた日本アルプスの山頂の岩に腰を下ろし景色を眺めると不思議な気持ちになりました。「疲労」よりも「達成感」がこみあげているのです。こんな感覚を味わったのは生まれて初めてでした。僕の目の前には、渦を巻く壮大な雲海が広がっている。遠くまで連なる山々を見ると、偉大な自然の中に、たった一人、包みこまれているような感覚になりました。僕は、父の話していた言葉の意味がようやく分かったような気がしました。

自然は美しい。四季とともに、一刻一刻と変化する、草花、風の音、匂い。一つとして、同じ景色に出逢うことはない。自分の身長を優に超える木々や見たこともない色の映える花々が、心地よい風に身を預けて踊るように揺れている。運命に逆らうことなく。その上に広がる空は、ただただ青く澄んでいる。ここにあるすべての命を讃えているようである。あの時の感動をこの場でみなさんに味わってもらえたらどれだけ素晴らしいだろうと僕は思います。一步一步自分の歩を進めた先に見られた景色だからこそ価値があるのだと思います。

今、僕がここでこうして話している間も、自然は変わらずあるがままそこにあります。不平や不満を言わず、ただ命を燃やし、繋いで生きています。僕は今中学三年生で、悩みや不安、さまざまに思いを巡らすことがあります。しかし、自然の中に身を置くと、自分も「ただ一つの命でしかない」ことを思い知らされます。「現状を嘆くのではなく、今を受け入れる」それこそ人としての強さを論されているような気がしています。皆さんが、悩んだり、苦しんだり、解決の糸口が見つからず、何もかも投げ出したくなるようなことがあるかもしれません。そんな時は、自然の中に身を預けてみてほしいです。自然は、いつも僕たちに新たな気づきをもたらしてくれます。やはり、山は裏切らない。



平和への祈り

岐阜県各務原市立稲羽中学校三年

千賀 優生奈

原子爆弾、空襲、兵士…

戦争に関連する言葉を見たり聞いたりするだけで私はとても辛い気持ちになります。そんな日の夜は眠れない、なんてこともあります。体験していない私ですらそう感じるのだから、戦時中に生きていた人たちはもっと辛い想いをしたと思います。

曾祖父、祖父のお父さんもそのうちの一人です。曾祖父は日本軍の兵士として中国大陸へ行き、相手側の爆撃を受けました。左足を切断しなければならなくなったそうです。初めは足首だけでしたが、壊疽が広がり、ついには太ももの上部でなくなっていました。

足を片方失った曾祖父は義足をつけて過ごしました。普通に畑仕事をすることや、スクーターに乗ることもでき生活に害はありませんでした。しかし、足を切断したことで襲ってくる痛みもありました。一カ月に一回のペースからだんだん増えていき、亡くなる直前には一日に何度も痛みを感じて、どれだけ病院に通っても、鎮痛剤を飲んでも治まらなかったそうです。

この話を祖母から聞き、戦争がどれだけ恐ろしいものかを改めて思い知らされました。当事者だけでなく何の罪もないたくさんの人が怪我をし、亡くなり、苦しみました。私はそんなものがあつてはならないと思います。民族がどうか、宗教がどうか。今まで起こってきた戦争の中で話し合いで解決できたものはなかったのか。それによって少しでも多くの人たちがそれぞれの人生を楽しめたのではないか。戦争の話をするたびにそう感じます。

今現在各地で起こっている紛争もそうです。たとえどんな理由があつても何百万、何千万の尊い命をなくしていいわけはありません。

それと同時に私たちが考えなければいけないのは曾祖父含め、日本のために戦ってくれた、たくさんの兵士の方たちへの感謝です。もちろん武器を持ち、人を殺してしまうのはダメなことです。ですが自分の命を懸けてまで、大変な思いをしながら戦地へ向かつて行ったことには変わりありません。今こうして美味しいご飯を食べ、友達と楽しく笑ってられるのもそのおかげです。そんな方たちに敬意を持って生活することが大切だと思います。

そして絶対にしてはいけないことがあると思います。それは今までの戦争をなかったことにすることです。歴史は何もない限り繰り返されます。戦争が終わってから七十九年。体験された方がどんどん減っていく中で、たくさんの人々を苦しめたこの出来事をみんなが忘れてしまえば、また未来でひょんなことから戦争が始まってしまうかもしれません。

その可能性を少なく、いやゼロにするためにできるだけ多くの「記憶」を引き継ぐことが大切だと思います。学校や地域でも、戦争について知る、学ぶ機会を作ることも必要だと思います。また、寄付や募金、ボランティアなど日頃からできることはたくさんあります。やがてそれが県に、日本に、世界に広がれば平和につながっていくのではないかと私は考えます。

それらの活動を通して私は創りたいです。世界中の人々が今度こそ幸せに暮らすことのできる世の中を。



違うから幸せなんだ

岐阜県各務原市立鵜沼中学校三年

植田 純平

小麦・大麦・卵・魚卵・落花生・アーモンド・そば。これらは僕が食べられないものだ。給食は一度も食べたことがない。十二年間一日も欠かさず母が専用のお弁当をつくって持たせてくれている。お弁当のために母は前日の夜に一時間以上かけており、毎朝五時に起きて準備をする。そんなお弁当は、手を抜いたものは一つもなかった。その母の努力も理解せずに、給食を食べているみんなの姿を見て、「みんなっていいな」と思ったこともあった。だが、ずっと近くで見えてきて、成長した僕は伝えたい。「僕が一番好きな食べ物はお母さん特製の米粉のみのパン」だということを。

みんながおいしいと思うものは食べられない。うどん、揚げ物、ケーキ。僕は生まれてから一度も食べたことがないものもある。

そんな僕でも、食べられるものだけを使って工夫し、たくさんのお食事を創ってくれた。

その過程では、きっと上手くいなくて悩んだり、苦しんでいたりしていたのだと思う。思い通りのものが作れなくて、やるせない気持ちになっただろうけど、諦めずに考え続けて、辿り着いたものなのだと感じる。僕は幸せだ。

父も休みの日、進んで美味しいものを作ってくれる。土日仕事があつて、疲れているだろうし、休みたいと考えているだろう。それでも、家族のために動いてくれる父のことも尊敬している。

同じ病院で生まれたKくんは、自分が旅行に行った時によく食べられるものを買ってきてくれる。

「アレルギーがあると分かっているのに、僕だけが食べられないのは嫌だ

から、食べられるものを買ってきた」と語ってくれた。

アレルギーで辛いと感じていることを氣遣ってくれたことが本当に嬉しかった。

僕の体は人と違う。しかし、違うからこそ他の人には経験できない幸せを感じている。辛いと思ってしまうえば、それ以上は負の感情しかうまれない。でも、僕は幸せだと思えている。そのように教えてくれた家族や友達にとっても感謝している。

違いがあるということは、より自分を、相手を知ることができるということだ。僕は今「負荷試験」を受けている。アレルギーのものを食べて、どれくらい食べれば反応が出るか試すものだ。反応が出はじめるとすぐにはおさまらない。だから怯えながら口にする。しかし、これを根気よく続けていけば、少しずつ耐性がつく。だから僕はこの試験を受けている。この経験から、少しのことでは折れない心を得ることができた。

五月に野球の大会があった。過去の自分は負けそうになると少し気分がのらなく、声が出せないこともあった。今回の試合は終盤に迫いつかれそうになったが、負荷試験のように辛くても、努力し続ければ報われるはずだと思い、声を出し続けることができた。負荷試験の経験もあったからこそ、僕は強くなれたのかもしれない。僕一人の力ではないが、できる最善をつくして勝利に貢献できた。

両親が努力して、僕を幸せにしてくれた。Kくんが思ってくれた。だから今度は僕が恩返しをしていきたい。これからは自分のことを氣遣ってくれた人のために声をかけていきたい。違うからこそその幸せに氣づくことができたから。



言葉に宿るもの

岐阜県各務原市立桜丘中学校三年

後藤 有槻

言霊。古来より日本では、言葉には霊力が宿ると考えられてきた。良い言葉を発せば瑞祥が生じ、悪しき言葉を発せば凶事生じる。言葉は飴の如く事象に跳ね返る。現代においてもそれは例外ではない。

「ゆうき君って変わっているよね。」その声が心の山奥を彷徨っている。

春の朝日を思う存分に浴び、誇らしげに聳える長栄山。新緑の風に揺られ、我先にと萌む草花。そんな彼らのように僕は正門に立っていた。今日から小学生になったのだ。これからどんな出会いが待っているのだろう。僕は目を輝かせた。入学からまもなくして、仲の良い三人グループができた。二人とは幼馴染で家も近い。それからよく、近くの公園で遊ぶようになった。しかし、その関係は長く続かなかった。昔から知りがり屋な性格だった僕は、思ったことや気になったことをすぐ口に出すことが多かった。

ある日いつものように遊んでいると、考えの違いで対立した。すると、「ゆうき君って変わっているよね。」「一緒に遊びたくない。」と言われた。その言葉を耳にした瞬間、僕は突如として鉛のように体が重くなった。そういうふうに使われていたなんて。悲しい。その日から二人と遊ぶことはなくなり、自分を閉ざしていった。休み時間を告げるチャイムが鳴った。みんなは、はしゃぎ声をあげながら校庭へと一斉に走り出していく。その姿を見て、自分も交ざりたいと足を踏み出した矢先、あの声が反響した。また、自分だけ外されるのではないだろうか。その記憶が僕を縛りつける。どうやって話しかけるのかも分からなくなってしまった。そして、孤独感で鬱ぎ込んでいった。

小学三年の冬。僕はこの各務原の街に引っ越してきた。転校先のクラスのみんなは、僕を温かく迎え入れてくれた。しかし、友達関係でトラウマがあった僕は、うまく馴染めずにいた。

また、新たな春を迎え僕は五年生になった。僕はトラウマと変わりたい思いで葛藤していた。そんなとき新しいクラスで、ある子と同じ班になった。その子は誰にでも明るくて優しく、接していてこの僕にも次第に惹かれ

ていった。

この日は待ちに待った宿泊研修。班で巡った伊木山オリエンテーリング。木漏れ日の差す山道で、ある子が僕に言った。

「ゆうき君。頑張ろう。」「このとき僕はなんだかとても頼もしいと感じた。ただそれだけの言葉なのに僕を突き動かす。この日を境に僕は少しずつ心を開けるようになっていった。僕はこのとき確信した。言葉には「特別な何か」が宿っていると。その「何か」は僕をそっと見守っているような気がした。言葉は不思議だ。あれだけ昔のことなのに、僕の心に暗い影を落とした言葉を、今でも鮮明に覚えている。一方、「ゆうき君頑張ろう」というあの時の言葉も僕は忘れていない。この言葉が今も僕を支えてくれている。それは、発した言葉が相手の心の中に浮遊する「霊」として宿り続けているからだと推察する。人を傷つける言葉は悪霊となって相手をいつまでも呪縛し、人を励ます言葉は守護霊となって相手をそっと後押しするのだと。言葉は発した方は記憶から消えても、相手の心にはいつまでも宿り続ける。そう思うと、あの日僕が発した言葉も、相手を知らず知らずのうちに傷つけてしていたのかもしれない。そして段々と後悔の気持ちが込み上げてきた。

言葉には人を変えるほどの力がある。このことは話し言葉だけでは限らない。情報化社会を生きる私たちは、スマホをスワイプさえすれば、簡単に誰かと繋がることができる。それは、コミュニケーションを円滑にする反面、相手が見えないため軽率に言葉を発しやすくなる。これは残念なことに、今の世界で誹謗中傷により、命を絶つ人が多いことにつながっている。発し方次第でその精霊は、人を崇りもすれば護りもする。そのことを我々は忘れてはならない。

人を苦しめるのも言葉、救うのも言葉。僕は言葉によって苦しみ、言葉によって救われた。言葉に魂を宿している。



褒められたいのは悪いこと？

岐阜県各務原市立那加中学校三年

安達 悠花

みなさんは最近、誰かに褒められましたか。はつきりと「はい」と答えられる人は少ないのではないだろうか。実際、褒められたいと思うことにうしろめたさを感じる人が多いようですが、私はそう感じません。なぜなら、これからの社会を生きる上で褒めるということはとても重要だと考えるからです。

幼い頃、皆さんが褒められた時のことを思い出してみてください。私は、とても小さなことですが、幼稚園の先生や友達に「字がきれいだね」「絵が上手だね」と褒められたことがありました。褒められたことによって自信をもち、どんどんできることが増えていったことを覚えています。しかし、成長すると、前褒めてもらえたことは当たり前となり、自然と「褒める」の基準が上がっていきます。また、褒められることを恥ずかしいと感じたり、褒められた時、周りにどう思われるのだろうかを意識したりするようになります。だから、人を褒めにくくなるし褒められにくくなるのです。

人間には五段階の欲求が存在します。生理的欲求・安全欲求・社会的欲求・承認欲求・自己実現欲求があります。中でも最後の自己実現欲求とは自分の可能性を最大限に引き出し、目標を達成したいと思う欲求です。この欲求があるからこそ人は理想の自分をもち、さらに成長することができのです。しかし、この欲求は承認欲求が満たされないとともにつことばできません。つまり、人から褒められる事は自分の成長にとって重要なのです。

私が褒められる事の必要性を強く感じているのは、今世の中で問題となっている迷惑動画や誹謗中傷の影響が大きいです。褒められる事が少ないと自己肯定感が低くなり過度な承認欲求につながってしまいます。情報を発信する側は自分を見てほしい、認めて欲しいという欲、批判する側は自分も認められたいという欲をもっている。どうしたらこの問題を解決できるかと語られていますが、私は、「認めること」を大切にしなければならぬと思います。私が認めることの大切さを実感したのは合唱祭の取組期間でした。伴奏者を務めていたこともあり、「クラスの合唱をよい良いものにしたい」という思いが強かったです。一人だけ空回りしているかもしれないと思い悩むこともありましたが、そう考えるのも、過去に私がリーダーをしたときに、自分の願いが届かない経験や、なんとなく前に立つ私を受け入れてもらえなかった感覚を覚えているからです。しかし、いざ本番を終えてみると「ピアノ、上手だったよ」「クラスの合唱を支えてくれてありがとう」といった感謝の言葉をもらえました。これまで頑張ってきたことが、嬉しかったです。

だれかに褒めてもらうことは、次の挑戦をしようと思うための原動力になります。「褒められたい」と思うのは悪いことではありません。承認欲求が強くても、強くなくてもいいのです。大切なのは周りの人の姿や行動を見て、その中にある思いや願いを理解しようとすることです。決して簡単なことではありませんが、いつかきっとみんなが認め合える社会になると思います。

